

中世初期日本国周縁部における交流の諸相

柳原 敏昭

はじめに

報告者は、中世初期・前期の九州に中国（宋）人居留地が複数存在したという見解を発表してきた⁽¹⁾。今回は、それを踏まえつつ、シンポジウムの趣旨、すなわち「ユーラシア大陸から日本列島へと渡来する人びとが、どのように移動してきたのか、また日本列島各地で地域的な関係をどのように築いて定着していったのか、また渡来系の人びとがもたらした文物が日本列島の文化に如何なる影響を与えたのか」に少しでも近づけるよう、議論を展開してみたい⁽²⁾。

I 万之瀬川下流地域

1. 概観

まず、本報告の主要なフィールドとなる鹿児島県万之瀬川下流地域について概観しておく。

万之瀬川下流地域は、鹿児島県南西部に位置する。万之瀬川は薩摩半島中央部の山地に源を發し、西流して東シナ海に注ぐ。下流域には鹿児島県では有数の沖積低地が形成され、海岸には吹上浜と称される砂丘が続く。標高 636 メートルの金峰山は、この地域を象徴する秀峰である。

中世には薩摩国に属し、万之瀬川右岸（北岸）が阿多郡、左岸（南岸）が加世田別府であった。万之瀬川をさかのぼると河辺郡にいたる。中世日本の西の境界は、キカイガシマであったから、万之瀬川下流地域は、当時の日本国の西の周縁部にあたるということになる。

万之瀬川下流地域は、弥生時代より南西諸島と北九州とを結ぶ海の道の中継点となっていた。高橋貝塚から出土したゴホウラ、オオツタノハなど南西諸島産貝類の半製品がそれを物語る（完成品は北九州で出土する）。当該期の南九州の墓制とは大きく異なる甕棺墓（阿多貝塚・下小路遺跡で出土）の存在も、北九州文化の飛地的流入を物語っている。

阿多郡の「阿多」は、たとえば「大隅隼人」に対応するのが「阿多隼人」であったように、薩摩国成立以前に後の同国の範囲を示す広域地名であった。その中心であった万之瀬川下流地域は、薩摩国北部の高城郡（現薩摩川内市）にできた国府に対する在来勢力の拠点であったといえる。



——は道、-----は阿多北方、阿多南方、加世田別府、河辺郡の境界。
ただし、検討の余地が残されている。万之瀬川の旧河道については「加世
田市史」（加世田市、1986年）224頁以下を参考にした。

図1 12～13世紀の万之瀬川下流地域（原図は柳原『中世日本の周縁と東アジア』本文註1より）

12世紀半ばになると薩摩平氏の一流・阿多氏が万之瀬川下流地域で強盛を誇る。同氏当主にして阿多郡司であった忠景は1150年代に「一国棟梁」化し、薩摩および大隅国の一部を事実上の支配下に置く。これが中央政府からは反乱とみなされ、1161年ころ、平家貞率いる追討軍の攻撃を受け、鬼界島に「逐電」（『吾妻鏡』文治3年9月22日条）した。ただし、これが直ちに阿多氏の没落にはつながらず、忠景娘婿の宣澄（出身は肥前国）が、折から九州支配を本格化させていた平氏政権に密着する道を選び、清盛弟の薩摩守平忠度のもとで目代をつとめることになる（「指宿系図」）。

しかし、鎌倉幕府が成立すると宣澄は、「平家謀叛の時、張本其の一也」（建久3年10月22日「関東御教書案」二階堂家文書）とされ、所領をことごとく没収される。新たに阿多郡地頭に任じられたのは、駿河出身の御家人・鮫島氏だった。のちに阿多郡は北方・南方に二分され、北方は幕府政所で重きをなした二階堂氏の所領となる。一方、加世田別府は当初、島津氏が地頭に任じられるも、やがて北条氏にかわった。河辺郡も得宗領となる。なお、阿多郡は、薩摩国の中で唯一、島津荘を含まない所領であった。また、鎌倉後期まで大宰府領であり、高城郡にあった薩摩一宮＝新田八幡宮の所領が同郡並みに分布するという特異な場所でもあった。

2. 持躰松遺跡の発見

万之瀬川下流地域が研究者によって本格的に注目されるようになったのは、1996年から始まった持躰松遺跡の発掘調査による（金峰町教育委員会ついで鹿児島県埋蔵文化財センターが担当⁽³⁾）。この遺跡は、現在の万之瀬川河口から約5キロメートルさかのぼった、同川右岸に位置する。12・13世紀を中心とする中国陶磁が、鹿児島県内では最大量発掘され、しかも器種が多

様さが際立っていた。東海産の常滑焼（西日本ことに九州での出土例は少ない）、畿内およびその近国産の東播系須恵器・和泉型瓦器・楠葉型瓦器、西彼杵半島産の滑石製石鍋、奄美諸島徳之高産のカムイ焼など、日本列島各地で生産された多種多様な焼物も出土した。

こうした発掘成果は、12・13世紀、この地域に海外とも連絡する港があり、それを中心とした経済活動が活発に行われていたことを示唆していた。それを踏まえて、当該期の地域像の復原を試みたのが図1である。中世文書（二階堂家文書、島津家文書など）、近世の地誌・地図、字切図、聞き取り調査結果などを用いて作成したものである。

まず、万之瀬川の流路が現在と中世とでは異なっていたことに注意しなければならない。19世紀初めに起こった大洪水によって河口が約2キロメートル北に移動したのである。中世の港は旧河口付近にあったと推定される。

南北朝期の古文書では、現在の南さつま市加世田の地頭所に市場があったとされている（永和元年10月1日「加世田別府半分坪付注文」島津家文書）。また、そこからほど近くの万之瀬川沿いには倉町という地名が残る。この付近には、薩摩半島を縦断する道が通っており、河川交通と陸上交通の結節点でもあった。そこに商業地、物資の集散地が形成されたと推定できる。持躰松遺跡もこのエリアに立地している。

宗教施設も存在した。中でも金峰山麓にあった観音寺は、平安時代後期、保延4年（1138）の古文書にあらわれている（保延4年11月15日「阿多郡司平忠景寄進状案」二階堂家文書）。阿多忠景が土地を寄進しており、地域の中心的寺院であったと考えられる。このほか阿多郡では高橋薬師堂、田布施神社、加世田別府側では益山八幡宮が鎌倉時代以前にさかのぼる。

領主居館としては、鎌倉時代以降の貝殻崎城（鮫島氏）、牟田城（二階堂氏）がある。阿多氏の居館は判然としないが、小中原遺跡がそれかとも言われている。

以上のように12・13世紀の万之瀬川下流域には港を中心として、商業地・物資の集散地、宗教施設、領主館などがあり、それらを川と道がつないでいたのである。では海外との関係を示す痕跡はどうであろうか。

II 唐坊

万之瀬川旧河口部左岸に現在、当房という地名がある。読みは「トウボウ」である。延文6年（1361）4月20日「島津道春讓状」（下野島津家文書）などには、「唐坊」という表記であられる（中世には加世田別府内にあったので加世田唐坊と呼んでおく）。

ここで想起されるのは、日本古代・中世における最大の国際貿易港＝博多にあった唐坊（「唐房」という表記もある）である。そもそも「唐坊」の字義は、「中国人の住む街あるいは一角」で、博多唐坊は、まちがいなく中国（宋）人の居留地であった。文献史料への初出は、12世紀初めで（西教寺正教所蔵『両卷疏知礼記』上奥書、西法寺所蔵『観音玄義疏記』奥書）、11世紀末には形成されていたと考えられている。終末は13世紀後半～14世紀初めかと言われている。博多唐坊跡地からは、「白磁の洪水」と形容されるような多量の中国陶磁をはじめ、中国人貿易商の居住を示す考古資料が大量に見つかっている。

報告者は、先に見た立地や博多との地名の一致から、加世田唐坊も中国人居留地であったと推定している。

実は、博多・加世田別府の他、九州（一部、中国地方西部）には、「トウボウ」と訓ずる地名が多数ある。図2は、報告者をはじめ正木喜三郎氏、村井章介氏、服部英雄氏、渡邊誠氏が小字図などから検出した「トウボウ」地名の分布図である⁽⁴⁾。これらは、次のような特徴を持っている。

- ①九州北～西海岸に集中して分布する（一部は中国地方西部に分布）。
- ②河口・湾の一角、内陸でも大河川沿いなど海上・水上交通に便利な場所に立地する。
- ③近くに中国製陶磁器を大量に出土する遺跡がある（博多・加世田のほか、福津市在自唐防地〈図2①〉＝西の後遺跡、唐津市唐房〈図2③〉＝佐志中通遺跡）。

また、以下のように中世の古文書に所見のあるものもある。

①福津市唐防地（図2①）

「正平二十三年宗像宮年中行事」（宗像神社文書）に宗像宮末社七十五社の一つとして書き上げられた唐坊八幡宮があった（現存せず）。宗像七十五社は寛喜三年（1231）ごろまでに成立しており、唐坊の成立は13世紀初めにさかのぼると考えられる。

②さつま川内市当房（図2⑦）

永仁3年（1295）11月4日「武光師兼蘭地配分状」（入来院家文書）に、次のように見える（原漢文。下線引用者。〈〉内は割書）。

吉枝名内河俣入道殿御分蘭々、孫満丸に打渡せしむる事

合せて

一所蒔崎唐坊蘭〈東は限る彦次郎殿垣根、西は限る今分堺之れ在り、北は限る八講田波多、南は限る大河〉

（中略）

右、大略配分件の如し、

永仁三年十一月四日

伴師兼（花押）

報告者は、図2のトウボウのうち、博多・加世田に加え、福津市唐防地（上記のように中世文書に所見がある）、さつま川内市当房（同）、唐津市唐房（漢字表記が保存されている）は、中国人居留地であった可能性が非常に高いと考えている⁽⁵⁾。これ以外にも福岡市姪浜（図2②）など中国人居留地が含まれている可能性はあろう。博多以外の唐坊が存続した時期については、これらが博多唐坊の支店の存在であったととらえ、12世紀半ば～14世紀初めと推定している。



図2 トウボウ地名分布図（柳原『中世日本の周縁と東アジア』本文註1より）

Ⅲ 新たな展開

持躰松遺跡の発掘調査によって万之瀬川下流地域が注目されてから、すでに20年が経過している。この間、同地域をめぐるは新たな研究の展開が見られる。ひとつは発掘調査が一層進んだこと、もうひとつは石造物研究が進展したことである。この二点についての近年の研究を紹介しながら、さらにシンポジウムのテーマとの関わりを探ってみたい。

1. 石造物研究

まずは、石造物研究から見てみよう。

近年、九州を中心として宋・元代の中国からもたらされたと考えられる石造物へ研究者の熱いまなざしが注がれている。薩摩塔（写真1）、宋風獅子（写真2）が代表的なものである。ここでは、より研究の進んでいる前者をとりあげる。

薩摩塔とは、写真1のような石塔を言う。上から相輪部（写真の例では欠けている）、屋根部（笠）、本尊を収める塔身部（仏龕）、須弥壇部の四つの部分からなり、須弥壇上部には高欄、下



写真1 南九州市水元神社の薩摩塔
(南九州市教育委員会 新地浩一郎氏撮影・提供)



写真2 南九州市飯倉神社の宋風獅子
(南九州市教育委員会 新地浩一郎氏撮影・提供)

部に四天王が彫られている。同時代の日本の石造物とは意匠が大きく異なる。薩摩塔という命名は、最初この種の石造物が鹿児島県(旧薩摩国)で見つかったことによるものであり、1961年に斎藤彦松氏が初めて使用したとされている。

最近の研究をリードしているのは、次の方々である。

まずは、高津孝・橋口巨・大木公彦氏ら鹿児島在住研究者を中心とするグループである(ここでは鹿児島グループと呼ばせていただく)⁽⁶⁾。中国文学者、考古学者、地質学者などが参加し、学際的な研究が進められているが、中でも石材研究(特に産地同定)に大きな特徴がある。次は、美術史(仏

像)研究者の井形進氏である⁽⁷⁾。当然、その専門に即した造形からのアプローチとなる。

これまでの研究によれば、薩摩塔は、福岡県・佐賀県・長崎県・鹿児島県で30～40基発見されている(図3)。数字に幅があるのは、部材しか残存していないものもあり、それを薩摩塔と認定するか否かで見解の相違が生じることによる。

石材について、鹿児島グループは、すべて中国浙江省産の梅園石である可能性が高いとしている。一方、井形氏はすべてを梅園石とすることには慎重である。

制作年代と制作地・制作地については、鹿児島グループ、井形氏ともに12～14世紀前半を中心とした時代の中国(宋・元代)で製作され、日本に舶載されたとしている。ただし鹿児島グループは、浙江省麗水市の靈鷲寺石塔を原型の一例であるとし、制作地も浙江省に絞り込めるとする。一方、井形氏は、薩摩塔の原型そのものは中国で未発見とし、浙江省が制作の中心地であることを認めつつも、福建省なども候補となり得るとする。また、薩摩塔の性格(造立趣旨)については、鹿児島グループが靈鷲寺石塔からの類推で供養塔とし、井形氏は神仙思想に裏付けられた中国海商の宗教施設だとする。

このように見解の相違も見られるが、12～14世紀前半に中国で制作され、九州各地に舶載されたという共通理解が得られていることは重要である。そして、報告者にとって最も注意されるのが、薩摩塔の分布である。上述のように福岡県、佐賀県、長崎県、鹿児島県と、九州北西部および鹿児島県南西部に偏在しているのである。これは、トウボウ地名の分布と大枠において重なると言ってよい⁽⁸⁾。制作された時期も唐坊の推定存続時期とほぼ一致する。

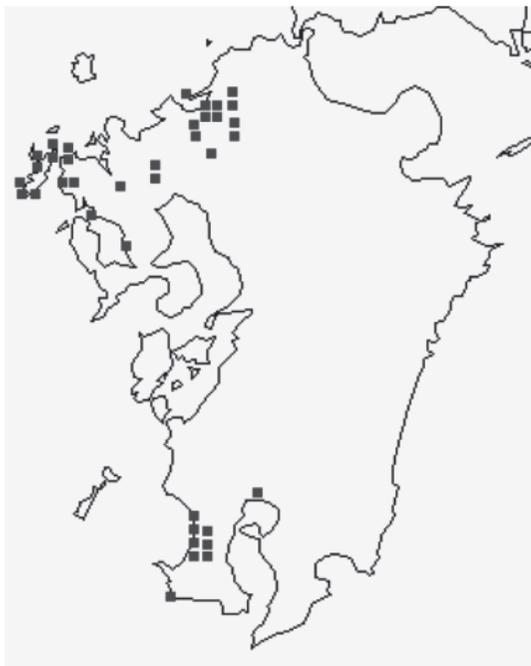


図3 薩摩塔分布図 (高津孝氏作成・提供)

そして薩摩塔は、鹿児島県では万之瀬川流域に集中している(9基中7基)。このほか同地域では宋風獅子も2件4体確認されている。特に橋口亘氏の調査によって、薩摩塔が加世田唐坊遺称地の当房や持鉢松遺跡に隣接する芝原遺跡、加世田の地頭所でも発見されていることの意味は大きい⁽⁹⁾。加世田唐坊居留の宋人によって建立されたり、持ち込まれたりした可能性があるからである。

2. 新たな発掘調査成果から

万之瀬川沿岸では、持鉢松遺跡の発掘以後も鹿児島県埋蔵文化財センターによって調査が続けられた。渡畑遺跡⁽¹⁰⁾、芝原遺跡⁽¹¹⁾などである(位置は図1参照)。渡畑・芝原両遺跡は持鉢松遺跡から連続しているので性格がよく似ている。しかし、相違点もあり、たとえば、建物跡は芝原遺跡から最もたくさん検出されていて三遺跡の中では中心的位置をしめるといわれている。また、上流にいくほど中世後期の遺物が多く出土するという。

本シンポジウムとの関わりで逸してならないのは、次に述べる渡畑遺跡の出土遺物と遺構である。

まずは、寧波系瓦の発見がある。寧波系瓦とは、当初は博多遺跡群で発掘されたもので、同時期の日本の瓦とは、造形的に全く異なっている。その瓦と鴟尾が渡畑遺跡

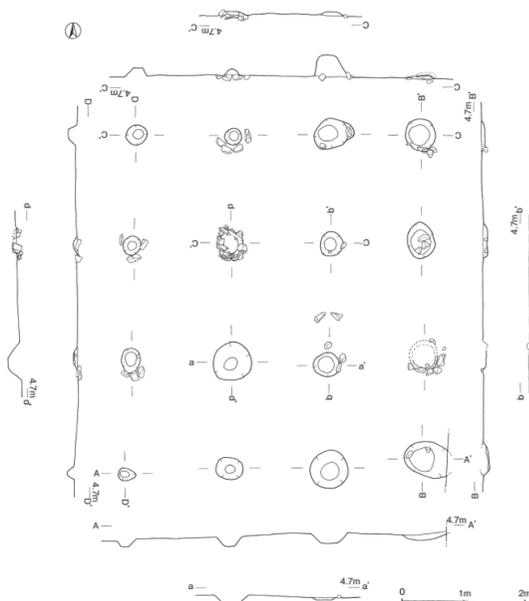


図4 渡畑遺跡出土の総柱建物跡

(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 159『渡畑遺跡』2のP 125第95図を転載)

で見つかったのである⁽¹²⁾。発見された数量は、破片数で355点に及ぶ。博多のものとデザインが全く同じで、焼成時期は12世紀後半と考えられている。最近、博多遺跡群・渡畑遺跡出土の寧波系瓦と中国浙江省杭州市産の宋代瓦に対して蛍光X線による成分分析が行われ、「杭州市・寧波市を中心とした地域で生産された可能性が高くなった」との結論も得られている⁽¹³⁾。なお、寧波系瓦は芝原遺跡からも出土している。

遺構では、図4に掲げた3間×3間の総柱の建物（南北5.5メートル、東西5.0メートル）が目立つ。これは同じ遺跡の他の建物跡とは異なり、柱が等間隔に配され、しかも配列方向が真北・真西を向いている。柱穴内に詰石しているものもあり、非常に頑丈な作りとなっている。また、上述の寧波系瓦はこの建物の周辺に集中し（出土地点が明らかな187点の内、175点）、鴟尾もこの建物の周辺で出土している。つまり、この建物の屋根を葺いていた可能性が高いのである。小畑弘己氏は、中国の宋時代の建物模型との比較から祠堂ではないかと推定している⁽¹⁴⁾。祠堂とは、中国で祖先の霊を祀るための建物で、そこで航海安全なども祈ったという。

3. 唐坊の人々

薩摩塔や寧波系瓦を伴う特殊建物跡は、中国人の渡来を具体的に示す重要な証拠と言える。そこからもう一歩進んでどのようなことがいえるであろうか。

まずは、渡来した人々の出身地である。薩摩塔の源流からいえば、浙江省を中心とした地域である可能性が高いであろう。

渡来した人々が石造物の造立、祀堂の建立も行っていたとなれば、一時的な立ち寄りではなく、比較的長期の居住であった可能性が出てくる。彼らの信仰については、仏教に基づくものなのか、神仙思想を考えた方がよいのか、研究者の意見は割れているが、薩摩塔の研究が深化すれば、決着がつくことであろう。なお、博多の中国商人は、同地周辺の天台系寺社の神人・寄人となって日本国内の流通に関わったと言われている⁽¹⁵⁾。万之瀬川下流地域では、前述した観音寺が天台系であり、同様の事態を想定できるかもしれない。

ともかくこれまで唐坊という地名や輸入陶磁器（陶磁器それ自体は宋人渡来の証拠とはならない）の存在から、中国人居留地の存在を推定してきたことからすれば、大きな進展であるといえよう。

おわりに

唐坊という中国人居留地は、鎌倉後期の北九州へのモンゴル襲来を前後して、消滅していったものと思われる。先に「唐坊」があらわれる古文書を提示したが、それらは既に実体を失った地名のみを記録したに過ぎないのであろう。中国大陸から人々が渡来し、九州に居留地を作るといふ波は一旦そこで収束するのである。

しかし、16世紀末になると再び九州沿岸はこの波に洗われることになる。明時代の経済発展（第二次商業革命）、明王朝の海禁政策、明・清交代、日本の戦国・織豊期大名の重商主義政策、豊臣秀吉の朝鮮侵略などを背景として居留地（多くは中国から、一部は朝鮮から渡来した人々に

よる)が数多く形成されるのである。この波は、17世紀に入っても観測されるが、やがて江戸幕府の「鎖国」政策によって、押しとどめられることになる(長崎を除く)。この痕跡は、九州各地に約25か所を数える「唐人町」という地名としてのこされている。

このように報告者は、中世にはその初期と末期の2回、ユーラシア大陸から日本列島(この場合は九州)へと人びとが渡来し、居留地を作るような波があったと考えている⁽¹⁶⁾。とはいえ、いまだ漠然とした像を提示できていないに過ぎない。今回のシンポジウムで学ばせていただいたことを基に、さらに探求を続けていきたい。

註

- (1) 柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』(吉川弘文館、2011年。以下、拙著とする)。本稿Ⅰ・Ⅱはこれによる。右著書以後に執筆した柳原「中世の交通と地域性」(『岩波講座日本歴史7 中世2』岩波書店、2014年)も関連する。
- (2) それぞれの論点に研究史があるが、シンポジウムの性格から、深入りせず、自らの見解をストレートに述べることにする。報告者らの唐坊に関する主張に批判的な代表的論文として山内晋次「日宋貿易と「トウボウ」をめぐる覚書」(中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院、2013年)をあげておく。また、博多唐坊研究の先駆者であり、惜しくも2015年3月に亡くなった専修大学名誉教授・亀井明德氏も博多以外に中国人居留地としての唐坊を認めることには批判的であった。遺著となった亀井明德『博多唐房の研究』(亜州古陶器学会、2015年)参照。
- (3) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書10『持鉢松遺跡 第一次調査』(1998年)、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書120『持鉢松遺跡』(2007年)。なお金峰町は、2005年秋に市町合併により南さつま市となった。
- (4) 正木喜三郎「筑前国野坂別符と輸入陶磁器」(同『古代・中世 宗像の歴史と伝承』岩田書院、2004年、初出1991年)、拙著第2部第1章(初出1999年)、村井章介「姪浜であらたに「唐坊」地名を確認」(同『中世史研究の旅路：戦後歴史学と私』校倉書房、2014年、初出2001年)、服部英雄「旦過・犬の馬場・唐房」(同『中世景観の復原と民衆像』花書院、2004年)、同「チャイナタウン・唐房」(同『蒙古襲来』(山川出版社、2014年。原形の初出は2013年)、渡邊誠「大宰府の『唐坊』と地名の『トウボウ』」(同『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣、2012年、初出2006年)など。
- (5) 高倉洋彰「歴史的地名活用の有効性と問題点—唐房と「トウボウ」地名—」(『九州考古学』90、2015年)は、「トウボウ」地名を外国人居留地としての唐房(唐坊)に結びつけることに慎重であるべきことを述べる。特に大唐米系の稲の品種である唐法師(トウボシ・トウボウシ)との混同に注意すべしとする。これ自体、肝に銘ずべきことであり、たとえば図2の⑮⑯は唐法師起源であろう。ただし、報告者は地名のみを根拠に「トウボウ」地名と外国人居留地を結びつけているわけではないので、旧来の立場を変更しない。なお、高倉論文の研究史整理には不正確なところがある。たとえば現在につながるような議論は、服部英雄氏ではなく正木喜三郎氏により提起されたとするのが至当である(正木喜三郎「筑前国野坂別符と輸入陶磁器」前掲)。この点については、拙著第2部第2章参照。
- (6) 数多くの論考があるが、とりあえず高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」(『鹿大史学』57、2010年)、高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究(続)」(『鹿大史学』59、2012年)、高津孝「薩摩塔と碓石—浙江石材と東アジア海域交流—」(山田奨治・郭南燕編『江南文化と日本』国際日本文化研究センター、2012年)をあげておく。

- (7) 井形進『薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる』（花乱社、2012年）にまとめられている。
- (8) 「大柁」と言ったのは、居留地と宗教的装置の立地は自ずから異なるからである。たとえば、後者は居留地内部に作られるとは限らず、山上など勝地に作られることも多い。なお、トウボウ地名の分布と薩摩塔の分布の重なりについては、中島圭一「中世社会の変質と南北朝内乱」（五味文彦・佐藤信編『日本古代中世史』放送大学教育振興会、2011年）にも指摘がある。
- (9) 橋口亘「中世前期の薩摩国南部の対外交流史をめぐる考古新資料」（『鹿児島考古』43、2013年）、橋口亘・松田朝由「南さつま市加世田小湊「当房通」の薩摩塔一万之瀬川旧河口付近「唐坊」比定地の中国系石塔—」（『南日本文化財研究』20、2013年）、橋口亘「九州南部の薩摩塔と宋風獅子」（2011～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書『西日本における中世石造物の成立と地域的展開』〈研究代表者：市村高男〉2014年）。橋口亘氏は、薩摩塔の流入について、①中国から肥前・筑前の沿岸部を經由して薩摩へ至るルート、②中国から薩摩への直接ルート、③中国から南西諸島を經由して薩摩へ至るルートの三つを想定し、最も蓋然性が高いのが①、次が②あるいは③としている。また、薩摩半島南部に薩摩塔が多い理由を、硫黄島（現鹿児島県鹿児島郡三島村）で産出する硫黄の輸出との関係に求めている。なお、今回のシンポジウムの討論の中で田中史生氏より、中国船は博多入港とそこでの手続きについては国家的な管理を受けているが、帰路についてはそれが及ばなかったのではないかとのご指摘をいただいた。とすれば、博多で日本への輸出品の大部分を降ろした中国船が、帰路、九州西海岸を南下して薩摩にいたり、硫黄を積載してから中国に戻った、その際の寄港地が万之瀬川河口口だった、ということも考えられるということになる。
- (10) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書151『渡畑遺跡』1（2010年）、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書159『渡畑遺跡』2（2011年）。特に断らない限り、渡畑遺跡に関する事項はこれらの報告書による。
- (11) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書170『芝原遺跡』3（2012年）。特に断らない限り、芝原遺跡に関する事項はこの報告書による。
- (12) 博多遺跡群近隣の箱崎遺跡群・香椎遺跡でも見つかっているが、その他では渡畑遺跡の例しか知られていない（大庭康時『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』新泉社、2009年）。
- (13) 小畑弘己「寧波・博多交流の物証としての寧波系瓦の化学分析」（中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院、2013年）
- (14) 小畑弘己「寧波・博多交流の物証としての寧波系瓦の化学分析」（前掲）
- (15) 三浦圭一「日宋交渉の歴史的意義」（同『日本中世の地域と社会』思文閣、1993年。初出1970年）、林文理「博多綱首の歴史的的位置」（大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂、1998年）。
- (16) 拙著第2部第1章

【附記】

- (1) 図3は、2014年3月15日に長崎県平戸市北部公民館で開催されたシンポジウム「中国・寧波産石材の拡散 異文化?の記憶—薩摩塔・碇石・宋風狛犬と東シナ海世界—」の資料として配付されたものである。作成者の高津孝氏からデータの提供を受けて掲載させていただいた。使用を許可された高津氏に感謝申し上げたい。
- (2) 図4は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに連絡確認の上、同センターのウェブページに掲載されている発掘調査報告書159『渡畑遺跡』2から転載させていただいた。記して感謝申し上げたい。
- (3) 写真1・2の掲載を許された、新地浩一郎氏にも感謝申し上げる。

- (4) 2016 東北アジア国際言語文化研究基地年次大会論文集（中華人民共和国吉林大学外国語学院）に掲載予定の拙稿「地域から見た12・13世紀の日中交流」と論旨に重複があることをお断りしておく。